

特選

林道を走る

西今町
谷口明美

早朝や夕のはざま
少年は走る
ようやく手にした
サイクリング車で
透きとおる空気を切る
地図から消えた過疎の集落
武奈・男鬼の
鹿や猪が飛び出す林道に
樹々の葉擦れの
蒼い渦を残して
そこから先はプロの仕事だよ
店主の苦笑に

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

たしなめられながら
求めたわずかな部品
器用な細い指先で
夢の細工をほどこし
古くて新しいからくりの
爽快さに憑かれて走る

解けない思いを払い
鮮やか車輪カバーの少女像を
虹色に回転させながら
フルスピードで
駆け抜ける

わたしは 風になる

※武奈・男鬼・・・鳥居本地区にあった
山腹の集落

特選

川音につつまれ

古沢町
真野美栄子

里山の実家は
浅い段差で ダバダバダバと
たえまなく続く 川音の中にあった
川は暮しの中の 大きな存在
川端の洗い場から
はじまる にぎやかな毎日があった
でも時折 川は急に表情をかえ
ふるえる程 こわい場に
ひどい水害にも見舞われた
ふる里を離れて いつしか
川の水音は
気持ちゆだねる 心のよりどころ
ゆきづまると 川を探し流れみつめ
落ち着きを 力を もらってきた

(評)自転車の少年の颯爽と走る姿が見える。相当吟味された言葉が走る。さわやかでテンポよく自分がサイクリング車で走っているような気持ちになる。秀逸だ。ただ終連の「わたし」に戸惑う、少年か作者か。

ある時 書店で

なぜ、ここに川が、水音が……

不思議顔で みまわす

本の付録 水流通のCDだと

思いもしない 妙薬をみつけた

その日から

実家の川音そのものが 我が家に響く

心地よいリズムで寄り添い 流れ

凍えるような川端で

手を真っ赤にし 手伝った 大根洗い

魚つかみに呆け ずぶぬれの水遊び

次々 遠い日が浮びあがる

水流通に 気持ちあずけ

縁側で 日向ぼっこ

編み針と

ふる里を、川音を

ゆるやかに 編み込んでいく

(評)

日々の生活が川音につつまれたふるさとを遠く思い、終連の「川音をゆるやかに編み込んでいく」作者の望郷の思いが優しく伝わる。ほっこりするいい作品だ。

特選

穴

東近江市

辰 巳 友佳子

ドアなし

電気なし

紙もなし

三〇センチの楕円形の穴

薄暗い口を開けている

人がいないことを確認してから

すばやく用を足す

着地の音がしない

私の尿はどこに吸い込まれたの

その時

バサッバサッバサ

暗さに目も慣れ

穴の下を覗くと

ニ、ワ、ト、リ

いる いる いる

トイレの近くに

円卓が三つ

ここで昼食なんだろう

並べられた料理は

鶏の蒸し焼き

鶏とトマトのスープ

鶏と豆の炒め物

「トイレはどこ」

「我慢できるなら

食べてから行った方がいいよ」

「あまり食べないわね」

「そうかな」

ふんと鼻で笑いながらトイレに向かう友

間もなく キャーと叫び声

一人ほくそ笑んでいると

空からトリのフンが頭に落ちてきた

ぬるりとした白い液体を指で拭くと

あたりは暗くなって

「さあ その太った体をいただくぞ」

私は何を聞いたの

大きなニワトリに行く手を阻まれている

あの穴に落ちたの

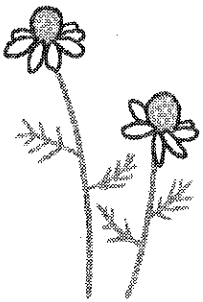
ここはクチャ

シヨクモツレンサ

体験中

(評)

意表を突くシチュエーションの中で展開される一つの皮肉な文明批評。作者の力量は間違いないが少し書きすぎの感もある。終連の工夫がほしい。



入選

野の仏

正法寺町
高井 豊

今日は
野の花が供えられていた

遠い日の修羅のしわざ

里人は

この石仏に

失われた おさない命と

そのたましいを鎮めてきた

施主の名も 苔で覆われている

仏の顔は

風雨に晒されて

のべらぼう だが

陽光の加減と

視るひとの ころの傾きによって

仄かに微笑する

赤い涎掛けが 新しくなっている

縁者は 絶えたようだが

誰かが供養をつづけている

野の脇に

野仏ひとり

石に還ることを 拒んでいる

(評) 長い年月風雨にさらされているが、いつも花が供えられている野仏のおだやかな表情が見えるようだ。終連の「石に還ることを拒んでいる」というフレーズで奥深い作品になった。

入選

かれいなる 日々

西今町

やまかみ まさよ

幻聴ではありません

耳元で足元で あやしく

確かになくのです なくだけでなく

甘くささやく日もあって

風にのり波にのり 噂も交じって

あの手この手 商売の手ものびて

放っておいてほしい気分半分 が

つい財布のヒモは ゆるんでしまい

買い込んだ物の仕舞い場所は忘れるし

いつの間にか物はおふれ 散らかり放題

オマエ 放ったらかしやる

コレ 飾っておくもんと ちがうで

シューカツ シューカツ シューカツ……

シューカツ シューカツ……

日々の暮らしが弛んでゆく前に

せっかちな響きで背中を

押されているようで

キチンと記録は書き止めます

たわい無い会話を三人で楽しみます。

(評) 甘いささやきについて乗ってしまつて買い込んでしまふ自分をそれでも突き放し、きっちり記録するほど冷静な私。華麗で「加齢」な日々をつきはなして笑う自分を楽しいと作者はいう。
その余裕にほっとする。



入選

みえぬもの

岡 町 正子
宮 地 正 子

見えぬもの？
どれくらい あるのかな…。
心・魂・オーラ
宇宙・神・地球
空気・臭い・風
力・音・エネルギー
人、動物等の命
まだまだ あるな
どれをとっても 大切なもの

真実・嘘
迷い・決断
信頼・裏切り
悪意・好意
信念・想念(明・暗)
強さ・弱さ・恐れ
痛み・苦しみ
心の声、叫び
幸・不幸

海、山、川の向こう側
明日という日
他人というわからない人

まけたわたし
かったわたし
もうどうでもよくなったわたし

(評) なるほど考えてみたら言葉で語られるもののほとんどが見えぬものだという作者の視点は確かだ。作者が沢山の言葉を信頼しようと思えば思うほど裏切られるのだ。だから「どうでもよくなった」と嘆くのだ。さらに自分流のことばの解釈があってもいい。

入選

北陸のお魚さかな

長 浜 市
勝 木 岩 松

こがらしが 林の中へ消えてゆく
だれも無口で
目を伏せて 家路へ急ぐ
荒れ狂う 冬の日本海
この海に 生きる辛さは いかほどか
陸に住む 人間たちに 比べると
海の中の 条件は悪い

寒さひとつでも 比較にならない
生きるためには 酸素の取り入れも
海水の中と 陸上の上とでは
全くその条件が 天と地だ

こんな悪条件の 中での暮らしの
お魚さかなたちの ご苦労は いかほどか
でも、零冷の水中での 暮らしから
じっくりと 成長する
お魚さかなたちの お肉は おいしいと
大好評だ お肉が縮まっているからだ
そう 冬の日本海のお魚はおいしいね
アジ、ハタハタ、イカ、サバなど
極めつきは 寒ブリだよ
寒ブリというと 富山県氷見の
寒ブリだよ

でも、北陸の日本海の寒ブリなら
どこの港であがってもおいしいのよ
料理店の老舗なら 氷見の寒ブリと
言えば 高いお代金をいただける
庶民は 他の漁港の寒のブリで
充分楽しめます 関西で人気です
人間も 幼いときから
冬の日本海のお魚たちのように
じっくり、ゆっくり 育てられれば
良い効果があるので ないですか
叱るときも愛をもって 訳を話し

可愛がるときも もちろん愛
わたしたち 人間にも
語りかけているのかも

(評) 子育てを海の魚に託して語られた
のを見たのは初めてだ。作者は沢山
の魚に感情移入して魚たちに同情も
する。願わくばもう少し整理して魚
と人間を対峙させ語ってはどうかと
思う。



佳作

安全神話

日夏 町
寺 村 しげる

佳作

ラブ・ボンデー

南川瀬町
横 谷 沙 智

佳作

黄昏色

西今町
松 本 トシ子

《総 評》

今年も沢山の応募ありがとうございました。
毎年思うのですが、いただいた詩の数だけ
いなそれ以上の人生とか生活が語られる場
面に遭遇します。当然のことでしょうが一
つとして同じ場面はありません。

人の生はそれぞれ一個しかなく誰もなぞ
ることができないうつくづく思います。で
すから誰もが詩として表明することに大き
な意味があると思います。書くことが私た
ちにとって自分の生をもう一度なぞってみる
チャンスを与えてくれているのかも知れま
せん。

ただ読者に共感を得たいと思うことは普
通の感情です。そこにどう伝えるかの工夫
が求められるでしょう。書く形式は沢山
ありますが詩という形式は自分の生や考え
を表明するにはよい形式だと私は思ってい
ます。そして伝えるためにはそれだけの覚
悟がいりましょう。そのためには他人の詩
を読むことと自分の詩を読んでもらうチャ
ンスを作ることが必要だと思っています。

石 内 秀 典

選者詩

イトヨのいる川

石内秀典

緑の川底に
背びれを振るわせながら
ひそかにイトヨがいた
銀色の鱗がひかる

音もなく
タンポポの綿毛が
水面に落ちて
静かに沈んでいく様を
たどっていた
光りながら揺れる
イトヨに
手をさしのべたくなる
私

この大きな川の
すみっこにあった
何十年もの前の
秘密のわんなどもはやないだろうと
訪ねたが

静かに水をすくいながら
熱くなる私がいた

あのときの少年は
ただ川をザブザブと進むのだった
激しい水の流れへ

驟雨

尾崎与里子

ビルの谷間に残された古色の聖堂で
昨日ひとりの青年に出会った
今しも現れる花嫁を待つ若い花婿
白い燕尾服は華奢で清々しく

緊張を帯びながら明るく素直で
偶然擦れ違つただけの私でさえ思わず
おめでとうと声をかけずにいられなかつた
「ありがとうございます」
彼は本当に嬉しそうに応えた
たとえば

春甘藍の葉を傷つけないように
一枚ずつゆつくり外しながら
その色や形にひそむ視えないものたちを
感じられる慎み深い人生
私が雑駁に駆け抜けて

日々に持とうとしなかつた穏やかな欠乏

優しさは時に脆さになって
相手を突き崩すかもしれないけれど

あつゝ雨

突然の驟雨に
案内板を抱えた介添人が右往左往している
控室では花嫁が

ペールの内で始まりの一步を踏み出せずに
窓の外を見て

花婿は祭壇の脇で花嫁を待つて
私は聖堂の片隅の聖アンナ像の前に佇み
和やかに雨打たれる一瞬の現在を
そして途切れること無く続く
世の深い哀しみを
祈つて



Ich liebe dich

机に並べたの
ICHLIEBEDICH*

山本英子

顔を上げると

その視線に出会ったの 何度も

改札を出て

歩く背を見送られてもいた

カウンターしかない喫茶店に

はじめて並んで座って

一言も話さず

いつも何も話さないで

マスターの淹れるエスプレッソを

時間をかけて飲んで

それから不意に又ひとりの日々

でも 秋が来て誕生日に

小さな包みが届いた

プラチナのチェーンに

アルファベットIのペンダントトップ

次の年はC

その次の年はH

十二年かけて十二文字

病床の人は

そのように語ると

“みんな嘘”と微笑み

火のように冷たい指で

プラチナのチェーンを私に

形見よ と与えた

*君は僕の大切な人だ

